分野別研究組織成果報告（2020 年度）

SDGs につながる幼児向け環境教育プログラムの開発と授業実施

Design and Conduct Environmental Education Program
Connected to SDGs for Pre-school Children

花田　眞理子（HANADA Mariko）

１．研究の背景と目的

環境教育による環境意識啓発は、法規制的手法、経済的手法と並んで環境政策の柱とされる「自主的手法」の一つである。平成 23(2011)年に環境教育法（旧法）が「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」に改正された際、第 9 条に『幼児期から』の文言が追加され、幼児に対する環境教育の推進が明記された。しかし幼児を対象とする環境教育には、環境問題の現状の理解や自分事としての行動化につなげるために、発達段階に留意したコミュニケーション技術が必要と考えられる。

そこで本研究では、幼児を対象とした環境教育に求められるポイントについて整理すると共に、幼稚園での環境授業実施のために大学生が作成した授業プログラムを通じた教育効果と、SDGs の視点からの環境教育プログラム作成の可能性について考察する。

２．幼児期における環境教育

２．１　発達段階への配慮および学校教育法における環境教育

環境教育は「環境の保全についての理解を深めるために行われる環境の保全に関する教育及び学習をいう」と法律で定義されている [1)]。環境教育は自分の周りの環境とのつながりや関係性を意識するための教育であり、全ての年代を対象とするべきと考えられる。その中で、幼児や児童などを対象とする場合、①発達段階への配慮と②実施する場所への配慮、の 2 点が必要となる。

まず発達段階への配慮についてであるが、国立教育研究所の「環境教育指導資料」（平成 26 年）では幼稚園における環境教育のねらいとして、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことが挙げられている [2)]。しかし幼児期の子供は、環境について言葉で理解したり表現する能力は未発達であり、理解を促そうとして一方的に働き掛けてもあまり意味がない。むしろ、自然の不思議さや環境の面白さ等について実感することが重要であり、こうした体験を通しての理解が、人間の生活と自然や地球環境との関係性や、持続可能な環境の保全について将来学ぶ基盤となっていくのである。

また幼児の生活は、家庭を基盤として広がりをもつことを考えると、実施場所への配慮も必要である。子供は生活経験を通してあらゆる事柄を学んでいるので、生活全体を環境教育の場として活用していくことが大切であり、幼稚園における環境教育では、日常の生活の中で行動に移すきっかけとなるようにと意識しながらプログラムを作成することが重要となる。

２．２ 幼稚園児に適したプログラム内容

幼稚園の環境教育を通じて幼児には「自然とのつながり」「人とのつながり」「ものとのつながり」などについて考えてほしい。しかし幼稚園の室内で行うという条件がある場合には、「ものとのつながり（3R/分別リサイクル、もったいない/節電、もったいない/食べ物）」や、「生きものの暮らしとのつながり（動物やそのすみかである自然を守ろう）」に焦点を当ててプログラムを考えることが適当であろう。これらのテーマは、①幼児にも理解しやすいこと、②生活の中の身近な行動を提案できること、③ゲーム／紙芝居／クイズ等どのような手法にも応用しやすいこと、などの特徴があると考えられるからである。

２．３ 授業プログラムに対する SDGs 視点の導入

2015 年に国連で採択された SDGs（持続可能な開発目標）では、直接教育に関連する目標として目標 4 があるほか、「省エネ」は目標 13、「ごみ・リサイクル」は目標 12、「生き物・生態系」は目標 14 や目標 15 などと関連付けるプログラム作成が可能である。例えばイルカがレジ袋を間違えて食べてしまうストーリーでは、海洋生物を慈しむ感情を通じて、自分の行動や身近な暮らしと地球環境の関係性の視座を持ち、SDGs の地球規模の環境保全や持続可能性に対する視野を養うことができると考える。

３. 幼稚園における授業実施プログラム

３．１ 環境教育プログラムの開発（演習科目）

筆者は環境理工学科 2 年生対象の演習科目で、幼稚園児への環境教育プログラム及び教材を作成し、実際に幼稚園で学生が授業を実施するという内容の演習を 2018 年度より実施している。

授業プログラムの作成に際して、学生には、①身近な生活に密着したテーマで、幼児が環境に興味を持つような内容とすること、②幼児の参加を通じた気づきを用意すること、③気づきを行動につなげるための働きかけを取り入れること、④基本的に文字や理論による「教え」を極力排除すること、⑤家庭での行動化を通じて家族にも伝わる工夫をすること、を意識するよう指導している。学生は 3 名程度のグループに分かれてアクティビティ（幼児の集中力継続時間を考慮して約 10 分）を作成し、それらのアクティビティをつなげて約 40 分間のプログラムを構成し、5 歳児（幼稚園年長組）対象に幼稚園の室内において学生が実施する。

表 1 は、2018 年度、2019 年度に実施したアクティビティの一覧である。これらのアクティビティのテーマに関連する SDGs を整理すると、目標２、11、12、13、14、15 などにつながることが分かった。

表 1　学生の作成したアクティビティ（2018 年･2019 年実施）

手法	テーマ【SDGs】	内容
紙芝居	食【2、12】	好き嫌いをなくそう（ばい菌に勝つ身体をつくろう）
	リサイクル【11、12、14】	生まれ変わるには分別が大切（違う箱では生まれ変われない）

	食【2、12】	ピーマンの妖精さん（栄養たっぷり）
人形劇	食【2、12】	ピーマンを食べるぞ（タラちゃんのペープサート）
クイズ	リサイクル【11、12、14】	何に生まれ変わるかな？
	資源【11、12、15】	「もったいない」クイズ（○×）
釣りゲーム	リサイクル【11、12、14】	ごみを釣って正しいごみ箱へ入れる＝班別競争
	生物【14、15】	生きもののおうちはどこ？
	生物【14、15】	山・川・海にすむ生きものたち
	水質【6、14】	ごみを釣ってお魚さんを助けよう（ポイ捨て×、拾う○）
ゲーム	食【2、12、13】	旬あてゲーム（食べ物にはおいしい季節があるんだよ）
	リサイクル【11、12、14】	分別ゲーム
	リサイクル【11、12、14】	鬼ごっこで取ったごみを分別
	リサイクル【11、12、14】	缶の分別（鉄とアルミを磁石で確認してペア探し）
	リサイクル【11、12、14】	分別→じゃんけん列車（収集車）→処理場でカード get

３．２ 授業プログラムの実施による効果

（１）実施から得た学生の学習効果（学生の授業実践レポートより）

①下見や事前準備の重要性の認識（園児の発達段階や反応/先生の園児への接し方などからの学び/園児と仲良くなれたこと/先生からアドバイスを受けたこと）

②幼児とのコミュニケーションの難しさ（自分のもつ知識を易しい表現で伝えること/SDGs の視点の呈示/園児の理解度の確認）

③学生同士の学びあいと成長の相互確認

④園児や先生方への感謝

⑤自己達成感の獲得

（２）幼稚園による授業評価（幼稚園指導者へのアンケートより）

①体を動かすプログラム内容や、イラストなどを多用した分かりやすい説明がとても良かった

②学生が子供の話を真剣に聞いたり、反応をよく見ている点が良かった

③「意味」や「なぜそうなるか」など初歩的な説明を丁寧にするとよい

④すべての子供たちが、「自分が主役になる」場面を準備するとよい

⑤この授業をきっかけに絵本や教材を見直すと、環境視点にあらためて気づかされた

（３）子供たちの学習効果（観察）

①子どもたち同士の助け合いの機会を提供

②動物たちへの慈しみを通じた環境保全意識や地球規模の視野の醸成

③学生を媒体にしたコミュニケーションという非日常的な刺激の家庭への広がり

④自己達成感の獲得

４. 考察

（１）演習プログラムの構成について

幼児向けのプログラムを考える際には、座学（紙芝居、人形劇、クイズなど）や、体を動かすゲームなど、いくつかのアクティビティを組み合わせながら一つのテーマでのプログラムとなるように構成すると効果的である。

（例: 自然環境が汚れる→生きものが棲めなくなる→ごみはごみ箱へ→分別でリサイクルへ）

また、一回の授業実施というイベントで終わらないように、実施後には学生がそれぞれのアクティビティに関連したポスターを作成して幼稚園で掲示し、幼児の意識づけを図ることとした。

（２）今後の課題

今後は、地域性（大東市らしさ）をプログラムに組み込んで、地域での行動と地球環境とのつながりやSDGsの視点を持つきっかけになるようなプログラム作りができないかと考えている。そこで幼稚園の指導者（園長や担任の先生）に、幼児対象の授業づくりについてヒアリング調査を実施した。

まず地域性に着目したプログラムについては、現在「北条っ子」として北条太鼓を練習しており、太鼓に牛の皮が張ってあることから、「ものの命を頂いている」ことを教えているそうである。ただし大東の歴史や文化などを特に意識はしていなかったので、今後取り入れたいと言われた。

また治水緑地に遊びに行くことや、周辺が土砂災害危険区域であることから、特に自然災害についてはしっかり教えているが、その結果、災害時の行動を家の人と話したり、避難訓練に真剣に取り組むという成果につながっているとのことであった。ここに気候変動に関する内容を入れて SDGs につなげることもできるのではないだろうか。

なお SDGs について、最近幼稚園でも扱うことが求められてきているとのことであった。

本研究を通じて、幼児教育においても SDGs の視点から、身近な行動と地球規模の様々な課題を関連付けて考えさせる環境教育の可能性が示された。そこで次年度以降の演習では、SDGs の背景となる問題意識などを組み込んだプログラム作りを指導していきたいと考えている。

【引用資料】

1)「環境教育等による環境保全の取組の推進に関する法律」（03_kaisei-h23_b1.pdf (env.go.jp)）

2) 国立教育研究所「環境教育指導資料[幼稚園・小学校編]」平成 26 年 10 月

【謝辞】

本研究の遂行ならびに環境授業の実施には、大東市立北条幼稚園の蔵下園長をはじめ先生方に大変お世話になりました。あらためて御礼申し上げます。